

海外チャレンジ支援 プログラム修了報告書

【公表用】

1. 概要

(1) 氏名

(2) 在籍校の情報(記入日時点)

ふりがな	さとう あきなり	提出日	2022 年 10 月 8 日
氏名	佐藤 曜有	報告の 対象期間	2021 年 9 月 29 日～ 2022 年 6 月 25 日
学校名	慶應義塾大学	学部名	商
ふりがな	けいおうぎじゅくだいがく	学 年	3 年
学科 専攻・コース 等	商学科		

(3) 卒業校

※当てはまるものに「●」

学校名	都立小山台 高等学校	課程	●	←全日制	卒業年月 (西暦)	2019 年
				←定時制		3 月

以下当てはまるものに「●」を入力

●	←在籍大学の協定・交換留学・学術交流	長期留学
	←在籍大学の研修プログラム	短期研修
	←在籍大学以外の国内機関主催・斡旋の留学プログラム	多様性 キャリア開発
	主催者・斡旋機関/業者名	
	←その他・特定のプログラムには参加しない。	

以下当てはまるものすべてに「●」

	←(1)本留学・研修は、在籍大学卒業に必須な留学である(卒業必修要件、必修科目等)
	←(2)本留学・研修は、在籍大学の単位として認定される留学である
●	←(3)上記(1)、(2)のどちらでもない

留学期間	2021 年 9 月 29 日 ～ 2022 年 6 月 25 日
留学国/地域	オーストリア/ウィーン

2. 留学計画の概要

【公表用】

(1) 留学計画のテーマ

変更前: オーストリアから日本企業が学べること。
変更後: 環境大国オーストリアに学べること

(2) 留学の内容(実践活動を含む)

留学計画の概要

当初掲げていた計画では「オーストリアの中小企業」を学ぶという目標を設定していた。しかしながら、履修授業の内容がシラバスと異なっていたり、コロナ対策のためのロックダウンによりうまく実行できなかったりしたため、環境問題へ計画の変更を行った。

気候変動の問題は年々とその影響を世界各地で見せ始めており、世界の国々がパリ協定で定められた目標に向かって様々な対策が講じられている。この問題は政治界、経済界に関わらず、社会の全ての部分に深く関わり、近年でも最もホットピックの一つとなっている。オーストリアは環境問題のバイオニアであるヨーロッパでも、特にこの問題に積極的に取り組んでいる環境先進国である。気候変動という問題に対して、この地で実際にどのような活動が行われているのかというのを、EU やオーストリア全国での取り組みから企業のものまで学習する。そして、それらをどのように日本に应用する事ができるのかというところに最終的な焦点を絞って行く。

これらに加えて、英語とドイツ語双方のアカデミックに限らない、日常生活における言語運用能力を向上させるために課外活動にも積極的に参加したいと考えている。その一つとして、地域のスポーツクラブに参加することを考えている。私は準体育会所属のアメリカンフットボール部に所属しており、そこでの経験からチームスポーツはあらゆる人々とのコミュニケーションを活性化し、心身を鍛えることを学んだ。スポーツクラブに参加し、心身とともに語学力の向上を目指したいと考える。

留学内容(実際に実施した活動)

ウィーン市内で生活する中で環境対策に関して目にしたものと感じたことのまとめ。

留学の後半の学期からは環境問題を中心とした経済学の授業を履修した。ある一つの授業では、フィールドトリップを多数行った。身近なところでは、大学のキャンパス上でいかにしてサステナビリティが保たれているかを建設担当者の話を聞きながらのキャンパスツアーに参加した。その他にも同様に地域レベルで環境対策を手がけるウィーンエネルギーといった会社の説明を受けた。そして、地域のレベルからオーストリアという国や EU レベルという国際的な視点で環境政策を見るために、オーストリア経済研究所やパリ条約の評価委員会の委員などエキスパートのプレゼンテーションを受けた。

(3) 留学の動機と背景

留学をしようと考えた動機

私が留学を志した動機を大きく分類すると以下の3つがある。①ドイツ語圏の文化に興味があった。②語学運用能力をブラッシュアップしたかった。③コンフォートゾーン(苦勞のない空間)から抜け出したかった。

- ① 興味を持ったきっかけとしては小山台高校時代に参加したドイツ・ベルリンへの3週間の交換留学プログラムがある。初めて外国人との長期的な交流を経験し、日本との文化的な相違に魅力を感じた。留学の目的としては学問的な探究がメインとなるが、異なる文化圏で上手に生活していく上で重要な要素の一つだったと感じている。
- ② 恥ずかしながら、中学・高校時代には周りと比べても平均以上の英語力を自分が持っていると感じていた。しかしながら上記のプログラムに参加していた時に、その考えは甘かったと気づいた。グローバル視点では英語が必要不可欠だと感じ、その研鑽のために留学を希望した。また英語のみではなく、ヨーロッパの主要言語の一つであるドイツ語学習にも力を入れることでグローバル人材としての更なる成長を遂げるという目標も持っていた。
- ③ 上記2つは社会人としてのスキル向上に目を向けているが、この既存の「コンフォートゾーンを抜け出したい」というのは、人としての成長が目的であった。留学以前は実家に住み、一人で何かを決定し自分で行動してみるという機会にかけていると感じていた。そのため、そのような状況から離れて、全く異なる環境に身を置くことで精神的な自立を獲得したいと考えていた。

(1) 留学の成果

※留学計画にそくして留学/研修でどのような成果を得たか。

要点(詳細は「9. 自由記述欄」にまとめた)

- ・気候変動を抑制するのに私たちには7年未満しか残されていない。
- ・ウィーンでは環境対策に関して、日本に比べて先進的な取り組みがなされている。
- ・スーパーマーケットにおけるビニール使用の廃止
- ・ウィーン市内でよく見ることができる水飲み場。
- ・EV 向けの充電ステーション。
- ・電車切符に表示された炭素排出量。
- ・環境対策のための科学技術に関して、政府の規制によりその利用が妨げられている。
- ・時間が迫る中、積極的な環境対策を政府・企業に訴えかけていく必要性
- ・デモや ESG 投資、消費における選択。

(2) 自己の成長

※留学/研修を通じて身についた力や留学/研修で得た学び とその理由・背景

留学先では大学の特徴上、世界各地から多くの留学生が学びに来ていた。そのため、多様なバックグラウンドから来た学生と話す機会がたくさんあった。日本人同士であれば多くを語らずとも伝わるであろうことも、異なる価値観や概念を持つ人々と会話するためには日本にいた頃より多くのコミュニケーションを必要とした。世の中の差別といった問題は、相手を知らないことから生まれる恐怖のために生じると私自身は考えている。それと同じように相手を知らない、知ろうとしないという状態は人間関係に必ず悪影響を与えると感じた。そのため、留学期間においては日本にいた時以上に相手とコミュニケーションを取り、相手を知ろうとすることに努めた。これは英語力の話ではなく、相手を知ろうとする姿勢のことである。個人的には相手がどのような人か素人したことで、相手に自分に関してポジティブな印象が与えられたり、チームワークを行う上でその活動をスムーズにしたりすることができたと感じている。以上のような経験から私は留学中にコミュニケーション能力の大幅な向上を自分自身感じた。そしてそのようなコミュニケーションを通して日本の良い点・悪い点など再確認することでアイデンティティを感じることもできた。

(3) 留学経験・留学の成果の活用

※留学/研修の成果・経験を将来に渡りどのように活用するか。今後の展望。

近頃、日本のニュースに取り上げる問題といえば、ウクライナ情勢や安倍元総理の国葬、統一教会問題などがあげられる。一方で、環境問題に関するニュースというのはほとんどニュースでは取り上げられていない。これは日本国民の環境問題というトピックに対する意識の低さを示していると思われる。

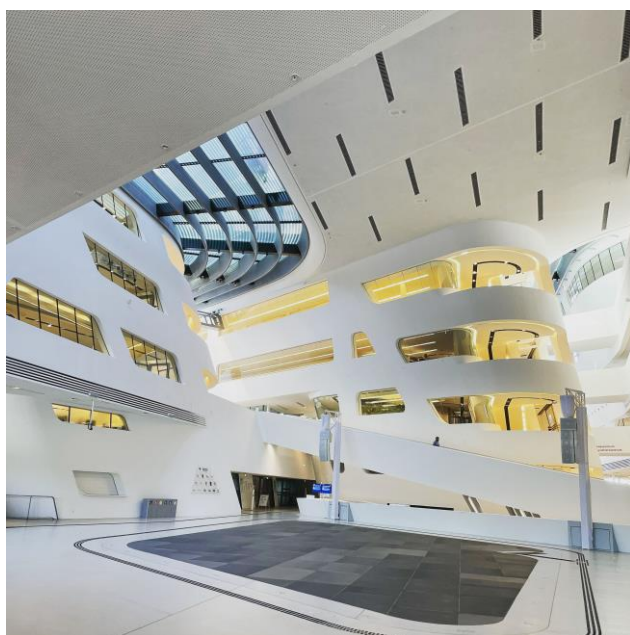
私は留学期間で気候変動が私たち若者の将来へどれだけ影響を与えるのか、そして他国の同世代がどれだけこの問題に焦点を当てているかを見聞きしてきた。そのようなことを環境先進国で学習した私はもちろん個人として今後の政治への関わり方や環境に良い選択肢を取っていくことなどが大切であると考えている。

そして個人としての行動の変化だけではなく、現地で感じた危機感というのをどのように周りの人とシェアしていくかが最も大切なことであると考えている。その危機感を世間に訴えかけるためにデモなどの活動に参加すべきであるし、それだけではなくこの経験したことを周りの家族や友人たちといった身近な人ともシェアして、一度でもこのテーマについて考えてもらうということが大切だと考えている。世界で取り組んでいかなければならない問題に対して、個人で行えることは限られているかも知れないが、やらないよりかはやる方がいいと考えている。

用】

受入機関の名称
ウィーン経済・経営大学(独:Wirtschaftsuniversitaet Wien)
受入機関の所在地
ウィーン市 2 区ヴェルトハンデルスプラッツ 1 番
受入機関の概要及び特徴
ウィーン経済・経営大学はオーストリアの首都ウィーンに 1898 年に設立された EU 有数のビジネスを専門とした大学機関である。オーストリア出身の学生のみでなく、ヨーロッパ各地、さらには世界各地からの留学生を多く受け入れている。そのため約2万4000人の学生のうち、27%が留学生で構成されている。特に修士教育は世界でもトップレベルであり、著名な認定機関からも認証を受けており、年々その成績を伸ばしている。
受入機関の様子
下に見える宇宙船のような建築物は WU キャンパスの中心にある図書館である。この建物は世界的に著名な建築家である故ザハ・ハディット氏によりデザインされた。ウィーンの観光資源の一つとなっている。

受入機関の様子が分かる写真



5. 留学授業・生活について

【公表用】

(1) 授業履歴 (※受講した授業のシラバス等授業内容が分かるもの及び成績表のコピー・提出したレポートを添付すること。)

受講した授業科目名	受講期間	週当たり 時間数	単位数	授業の内容 及び授業から得られたこと
Economics of European Integration 英語	10/12-10/21	3.25	6	欧州統合に関する主な経済理論や政策、EU 市場の機能に関する様々な政をミクロ・マクロ経済学の両方の視点から学習した。授業形態は教授の講義、ミニテスト、期末テスト。日本と異なる構造の経済圏における経済問題の解決について深く学習し、貿易のみに留まらずに金融、政策面でも統合・運用に挑戦するEUの難しさを改めて実感した。またEU統合への過去、現在進行形のプロセスだけではなく、将来の展望も学習した。現在、日本には似たような協定としてRCEP締結が話題となったが、これからいかに発展していくのかなおさら興味深く感じる。
International Business Strategy 英語	10/5-12/14	2.5	6	海外進出の際に用いられる戦略と、既存の国際事業のネットワークを運用・発展させるための戦略を学習した。授業内容は講義、グループディスカッション、グループプレゼンテーション、期末テスト。 特に80、90年代の国際事業展開に成功したケーススタディとして日本企業が数多く挙げられるなど、外に出て改めて出身国の企業について学習する興味深い経験であった。しかし一方で、学生同士のディスカッションでは中国企業の名が多く挙げられ、現在の日本企業の現状を直に感じ取る事ができた。
SME- Course 4: Internationalization & Markets I - Marketing & Market Research 英語	10/22-12/10	3	6	大企業と異なり資源に乏しい中小企業が国際市場に参入する際に直面する問題と、これらの問題が国際マーケティングリサーチを適用することでどのように解決されるか。授業内容は講義、グループディスカッション、グループプレゼンテーション、テスト。 マーケティングのプロセスを学ぶことができて非常に有意義な授業であったが、特に中小企業に注目しているわけでもなく、期待通りの授業内容では無かった。
Sustainable Internationalization Strategies - A Project with Siemens Mobility 英語	11/20-12/20	2	6	東欧地域の本部であるシーメンス・オーストリアの協力のもと、グループごとに東欧諸国へ進出の可能性をその国の環境のリサーチに基づいて実際にシーメンス社員に発表するというもの。授業内容は2回のグループプレゼンとテスト。プロジェクトの作成中に教授やシーメンス側からのアドバイスはあまり得られなかったが、いかにして前提条件の異なる海外諸国

				へ進出し、新たなビジネスチャンスを獲得するかというリサーチの手順を学ぶことができたと感じている。また、授業の構成のほとんどがプレゼンであったので、その準備に向けてチームでどのように役割分担をするかなど知識以外の実務的な事も学ぶことができたと感じている。
German ドイツ語	10/9-12/22	2	2	日本での授業では文法や単語のみをひたすらノートに写し記憶しているのみの学習であったが、こちらではノートを取るのみではなくクラスメート同士で学習事項をその場ですぐ使って会話するというように非常に実践的であったという印象。英語を学習する際でも同じことが言えると思う。他の東アジア諸国と比べて日本のコミュニケーション英語が劣ってしまうのは、このエクササイズが圧倒的に少ないからではないかと必然的に考えるに至った。
Economic Modelling with Mathematica 英語	3/9-6/15	2	6	R や Python といったプログラミング言語の中でも、アナリティクスやデータのビジュアル化に優れる Wolfram 言語を使用し、経済モデルの修正、作成を目的とした授業。具体的な授業内容はプログラミング、インタラクティブな発表。クラスメイトはプログラミングの経験者が多くついていくのが大変であったが、教授の助けもあり経済モデリングの基礎的な部分を自分のスキルとして身につける事ができた。
EU and US Climate Change Mitigation (一番面白かったやつ) 英語	3/3-5/19	6	6	NDCs やパリ協定、Fit for 55 などのような EU と US における気候変動対策をテーマの中心に、気候変動の現状とその緊急性について学習する。最終的には将来的に必要なものであると予想される自分なりの気候変動対策を構想するという授業。 授業内容は講義、リーディング、校外学習、レポート、プレゼンテーション。 近年、社会のどの点においても関わってくるトピックについての知識を獲得し、自分なりに考えてみる機会も与えられたとても有意義な時間を過ごす事ができた。日本で今まで受けてきた授業とは異なり校外学習が多く計画され、授業時間の半数以上を最前線でこの問題に取り組んでいるプロフェッショナルによるプレゼンテーションを通して現場の生の声を聞く事ができた。

Game Theory I : Strategic Behavior 英語	3/2-4/27	3	6	この授業はゲーム理論の基礎的な知識を利用して戦略的思考、そしてマネジメント的な意思決定におけるツールについて学習する。 授業内容は講義、クイズ、実施されたクイズの分析、テストである。 この授業の特色として授業中にクラスメイト同士で行われるクイズがあった。このクイズはゲーム理論に則していると同時に日常生活に近いもので、毎授業、クイズが行われた結果の分析をしてくるという宿題が与えられた。このメソッドは実際にゲーム理論を身近に感じるとともに、理論について理解を深められた良いメソッドであったと感じた。
Sustainable Economics and Business II : Sustainable City 英語	3/7-5/9	3	6 ECT	都市発展の歴史を通して都市におけるサステナビリティへの理解を深めることを目的とした授業。空間プランニングから民主主義や市民参加など幅広いテーマを取り扱い、それらの問題の繋がりを意識してみたい事で、さらに大きな経済、環境、社会という視点でサステナビリティへの理解を深める。 授業内容は講義、授業内ディスカッション、リーディング・それに対するリフレクション、グループワーク・プレゼンテーション。

(2) 参加した行事／イベントなど （※パンフレットなど内容が分かる資料があればコピーを添付のこと。）

行事／イベント名	日時	主催者	行事／イベントの内容及び得られたこと
WU Tigers	週 3 回のトレーニング	WU	大学のアメリカンフットボールチームに所属。チームには基本的に留学生はおらず、チーム内の会話もドイツ語で行われていた。そのため、初めのうちはチームに慣れなかった。しかしながら、大学の授業やイベントだけでは出会えなかった現地学生との交流の場を得ることができた。
WU lecture by Prof. Sigrid Stagl	5/15	WU	環境問題と経済学を融合させた Ecological Economics という比較的新しい学問の研究者である Stagl 教授による講義。 環境問題と人間開発指標を関連付けた点や気候変動対策における行政改革の重要性を指摘した点など非常に興味深い内容だった。
大学でのバスケットボールサークル	週1回	WU 学生団体	週に一度だけバスケットボールが趣味の学生たちが大学の体育館に集まり、ミニゲームをやっていたので参加した。アメフト部同様に他の学生と交流することができた。

(3) 留学で得られた学位や資格等 （※証明書などがあればコピーを添付のこと。）

資格や学位ではないが、授業で書き上げた環境問題に関する文章が、他のクラスメイトのものと一緒にイリノイ大学の EU センターという機関のページに掲載された。

<http://eucenterillinois.blogspot.com/2022/07/accelerating-climate-change-mitigation.html>

※宿泊先での生活や特に注意したこと

ウィーンはみなさんご存知の通り、「音楽の都」として一般に知られている。しかし、実際に1年間生活してみて音楽だけではなく、芸術活動全般が非常に盛んな街でもあることを知ることができた。オペラ座劇場ではオペラやバレエの公演は一番安く10ユーロで鑑賞することができる。また「ウィーン世紀末」という19世紀末を代表する芸術運動出身のクリムトの絵画や著名な建築家による建築物などを街中で気軽に楽しむこともできる。このように実際に1年間生活してみて、「音楽の都」という面だけではなくウィーンの良い所がたくさん見つかったため簡単に紹介したい。

そもそも留学先というと英語のブラッシュアップのためにアメリカやイギリスを選ぶ日本人学生が多いと思うが、留学先としてのウィーンは意外な穴場であると思う。なぜならオーストリアの公用語はドイツ語であるが、ウィーン市民のほとんどは英語が堪能であるからである。そのため、英語力向上のために十分な英会話を街中で体験することができる。

その他にも、オーストリアはヨーロッパの中央に位置するため、ヨーロッパの各都市を簡単に巡ることができるというのも素晴らしいメリットであると思う。ヨーロッパという一般に、フランスやドイツ、スペインなどの西側諸国だけをイメージするかもしれない。しかしウィーンを拠点とすれば、それらの都市だけでなく、チェコやポーランド、ハンガリーやスロバキアなど旧ソ連の影響を受けて西欧とはまた趣の異なる、美しい国々へのアクセスも簡単となる。

また、近いのはヨーロッパの周辺国のみではない。ウィーン市内では自然へのアクセスがとても簡単である。海は残念ながら無いが、夏にはドナウ川で泳ぐことができる。また、中心地から30分ほど移動すれば、ワイン畑が広がる山でハイキングを楽しむことができ、秋にはそこで収穫された新ワインを楽しむこともできる。

以上のような点の他に、政治的な安定性と優れたインフラ、充実した医療などを理由として、ウィーンは2022年、エコノミスト発表の「最も住みやすい都市」ランキングで東京や大阪を大きく超えて第一位を獲得した。そのため、ウィーンは私のような外国人や初めての一人暮らしを経験する者にとって、新しい生活を始めるのに最も適していたと言えると思う。

6. 留学を考えている人へのメッセージ

留学をしてよかったこと、留学前にやっておけばよかったこと、留学を勧める理由/進めない理由など

あくまで私の意見ではあるが、1年間で交換留学と語学留学を経験した者と言えることは、機会があるのならば留学はすべきということである。私の考える留学から得られる大きなメリットとしては、視野を広げられるということが挙げられる。

まず、学問的には日本の大学では学ぶことができないことを学習することができるということがある。日本の大学では例えば「日本の経済史」という授業があるように、当然のことながら留学先でも現地事情を中心としたトピックを重点的に学習することができる。私の場合、「環境問題」というテーマに関して授業内で実際に研究者や研究施設に足を運んでみるなど、目の前でその情勢を感じ取ることができた。このように留学というのは、今まで自身の興味の範囲外に位置していたトピックを自分の視野に組み込むことができると考えている。

また学問的な観点の他に、私は文化・精神的な視野の拡大というのも体験した。私の留学先は他のウィーンの大学に比べて留学生の割合が多いために、ヨーロッパ各地のみならず、世界各国から来た異なるバックグラウンドを持つ留学生と交流する機会があった。彼らとの交流は今まで日本では常識と考えていたアイデアに関して、また異なった視点からの新しいアイデアを与えてくれた。この点は特に、現地に行って初めてわかることが多いため日本では体験できない部分であると考えている。

他にも将来的なキャリアを考えるときに、その舞台が日本に限られることはないということを身に沁みて感じた。留学先で留学生と共に学習する中で、自分のような人間でも周りと同じくらいにやっていくことができるということに気づいた。この気づきというのは私の将来に大学院への進学や海外での就職など幅広い可能性を与えてくれたと感じている。

このような新たな気づきを通じた視野の拡大というのは総じて、自分の将来に対してポジティブな効果を与えてくれたと感じている。またグローバル人材やマイノリティの更なる社会進出が求められる中で、多様性というのは切っても切り離せないキーワードであると考えている。上記のような視野の拡大というのは、多様性への理解に大きく貢献してくれたと考えています。

このようなことを踏まえて、留学前にやっておくべきことは二つあると考える。まず一つ目は日本のことをよく知っておくことである。やはり海外における知識や経験を理解していく上では、自国の物事との比較というのが非常に大切なステップになる。留学前に日本はどのような所でのどのような人がいるのだろうと考えておくと、さらに多くの発見が留学中にできると感じている。またもう一つはやはり語学力の向上である。以上のような経験の獲得のためには、英語でのコミュニケーションが必ず必要となる。語学力が高ければ高いほど、学ぶこともそれだけ多く幅広くなると考えている。

写真	説明
	この写真は大学の友人と一緒にプラハへ旅行した時に訪れた旧市街広場のものである。左側の塔の下部には世界的にも有名な天文時計が見られる。歴史的な価値も高くとても綺麗な時計であるのだが、決まった時間に動き出す人形仕掛けはガイドも「世界一がっかりする時計仕掛けの一つ」と紹介するほどである。現地では、その評価の正しさをしっかりと自分の目で確認できたいい経験であった。 プラハという街自体はウィーンから電車で、片道約4時間ほどで訪れる事ができる。大戦中に大きな空襲を受けていないため、ロマネスク様式からキュビズム、モダン建築まで様々な時代の建築物が現在まで残っている。たった4時間の移動で大きな文化の違いを感じることができるという点は、ヨーロッパ旅行の大きな特徴であり、旅行を魅力的にするメリットでもあると考えている。
	これは友人の誕生日をお祝いした時の写真である。誕生日の主役であった彼はメキシコ出身で、彼の希望もありメキシコ料理屋さんでディナーを頂いた。 私の留学期間は1年間だったが、彼らの留学期間は基本的に1学期のみで終了する。そのため、多くの友人が12月終わりに母国へ帰国していった。帰国後も連絡を取り合っている仲になった。彼らにはご飯や遊びに誘ってくれるなど色々とお世話になったためとても感謝している。
	これは現地でできたオーストリア人の友人たちと帰国直前に撮った写真である。 彼らはまさに現地人しか知らないイベントやスポットに連れて行ってくれたり、ドイツ語の練習相手になってくれたりとたくさんお世話になった。最後には、私のお別れ会も開催してくれまさにおんぶに抱っここの状態であった。彼らと知り合えたことは私の留学で得た宝物の一つであると感じている。
	この写真は所属しているアメリカンフットボール部の活動再開後、最初のトレーニングで撮られたものである。新型コロナウイルスの感染拡大により今年3月まで活動休止の状態に入っていたが、コロナの状況が落ち着いたため活動を再開し無事に復帰する事ができた。 練習再開までの間はあまり身体を動かしていなかったため、身体サビを落とすところから始まり、久しぶりのスポーツを存分に楽しむ事ができた。また、部員にも新しい顔が増えており、さらなる交友を広げることもできた。

費用調達

調達先	摘要	金額
在籍校奨学金	独立行政法人日本学生支援機構 海外留学支援制度(協定派遣)	720,000(月 80,000*9) 円
在籍校以外の奨学金	本プログラム	560,000 円
現地インターン給与		円
		円
		円
		円
合計		円

支出経費

費目		予算額	実績	研修参加費に含まれる 場合は、●を付ける	摘要	
「研修参加費」 ※在籍大学・主催者に一 括で支払うもの		0 円		←往復航空運賃		
				←宿泊費		
				←食費		
				←その他		
以下の欄には、上記「研修参加費」に含まれる予算額は記載しない。(二重)						
費目		予算	実績	摘要／差異の内容		
往復航空運賃		150,000 円	145,820 円	1,210 ユーロ		
学 費	在籍大学授業料	550,000 円	550,000 円			
	現地学校等授業料	0 円	0 円			
	その他	0 円	0 円			
現 地 滞 在 費	家賃/宿泊費	550,000 円	582,000 円	4,850 ユーロ		
	食費	300,000 円	180,000 円	1,500 ユーロ		
	交通費	20,000 円	21,840 円	182 ユーロ		
	保険費	100,000 円	182,400 円	1520 ユーロ		
	学生会費	2,000 円	2,640 円	22 ユーロ		
そ の 他	書籍代	20,000 円	0 円			
	娯楽費	50,000 円	200,000 円			
		円	円			
合計		1,742,000 円	1,864,700 円	現地通貨レ ート	予算設定時のレート: 1ユーロ=120円 実際のレート: 1ユーロ=約140円	
					通貨単位名	ユーロ

※合計欄には「研修参加費」を含む費用の総額を記入のこと。

- ① 留学のテーマに関する報告
- ② 留学を終えて、自分自身の成長や学び(実感したエピソードを含め)

※①・②について、それぞれタイトルを付け各2～3ページ程度にまとめてください。

※写真、画像、グラフ等の挿入、貼り付けは自由です。

私が上記の留学テーマについて説明していく前に、なぜ私がこの環境問題というテーマをピックアップしたのか、そのきっかけから話をしたいと思います。

そもそも私が当初の留学計画として予定していたのは、「オーストリアの企業がどのようにして海外進出に成功しているのか」というテーマでした。オーストリアは「音楽の都」として世間一般に知られていますが、その裏で実際には盛んな中小企業を中心として、一人当たり名目 GDP が第 14 位という経済大国でもあります（2022 年度、日本は 27 位）。当初はこの事実を知り日本企業も学ぶところがあると考え、留学先でもこのテーマを中心とした学習を計画していました。しかしながら、履修した授業がシラバスに沿わない内容であったり、新型コロナウイルス対策としてのロックダウンがあったりしたために、なかなか計画通りに進めることができませんでした。この状況に悩んでいる中で、急に僕の興味を惹きつけ始めたのが、当初のテーマからは大きく離れた「環境問題」というテーマでした。きっかけは友人とランチを一緒に食べている最中に受けた、デンマーク人からの一つの質問でした。それは「環境問題についてどのくらい考えている？」というものでした。その前まで「どのパターがこのパンに合うか」というような話をしていたのに、彼女は突然、僕に向けてその質問を投げかけてきました。正直にいいますと、当時は全くと言って良いほど環境問題についての知識がなかったために、適当に受け答えをしましたのを覚えています。一方で、その友人はもちろん環境問題に関して非常に大きな興味を寄せており、それを日々の行動にも反映していました。彼女はベジタリアンで一緒に食事に行く際も、必ず肉が入っているものは食べないというルールを持っているのは知っていました。聞くと、それは牛が温室効果ガスを多く排出するためであると説明してくれました。

環境問題というのは地球に住むすべての人に関わる問題であります。” Climate Clock”によると、パリ協定中でも重要な指標として登場する+1.5度の気温上昇まで残り7年未満しか私たちには残されていないと科学的な検証がされています。この1.5度という数字は具体的には、産業革命以前の1850-1900年の平均的な気温を基準とした時の気温上昇の指標であり、2019年の時点で既に気温は1.1度上昇したと言われています。この1.5度という基準を超えてしまえば、気温はそこから加速度的に上昇し始め、いかなる手法でもその上昇を抑制できなくなる可能性があります。そして、この気温上昇は全ての生態系そして人類に壊滅的な影響をもたらすと考えられています。この事実に対して同世代の友人が自分の生活を変えるほどの行動を起こしているのに、たった一つの質問さえ十分に答えることができなかった自分を恥ずかしく思いました。その質問を受けてからは環境問題について自分でも考えるようになり、ウィーンという街の見方さえも変わっていきました。というのも環境対策という面でウィーンの街を歩いてみると、この街がこの問題に対して非常に多くの取り組みが行われていることに気付かされるからです。以下ではその例について5つほど紹介したいと思います。

まずスーパーマーケットにおける取り組みについて、日本との違いをみていきます。日本では近年、コンビニやスーパーでのビニール袋の有料化するという動きが話題になりました。ビニール袋が有料化されたことで、普段マイバッグを持ち歩く人も増えたのではないかと思います。この動きはウィーンでも見られましたが、異なるのはビニール袋が法律によって完全に廃止されたという点です。そこでレジ袋の代わりに利用されているのが紙の袋です。これはレジにおいてのみではありません。パンコーナーでもビニール袋ではなく選んだパンを包むのに紙袋が利用されています。また特に異なる点は野菜コー

ナーで見ることができます。日本ではビニールのレジ袋が有料化された後でも、野菜はたくさんのプラスチックに包まれて陳列されています。一方でウィーンでは、多くの野菜がカゴにそのまま入れられた状態で売られています。この点、プラスチックの利用を減らしていこうという方針が首尾一貫されていると感じ取れます。

次は街中を見ていきましょう。街の中心地では、数分歩けば必ず銀色の塔を道端に見ることができます。これは水飲み場で誰でも気軽に利用することができ、夏になると多くの人が列をなしています。東京でも公園内には基本的に給水所を見ることができます。しかし街の中心地で、しかも流れているのが美味しいアルプスの湧水であればまた特別であると思います。ウィーンで簡単にアルプスの水を飲むことができるというのは市民の誇りであるとともに、環境的に見てもペットボトルを購入する代わりにマイボトルの持ち歩きを推奨することにもつながっています。実際に私が一度利用した時には、並んでいるすべての人がマイボトルを持っていたということもありました。市民の興味・関心を上手に環境対策にも利用している例の一つであると言えるでしょう。

環境問題で大きな問題の一つである自動車に関しても、電気自動車のための充電ステーションが街中に設置されています。ウィーン市営の電力会社によれば、平均して400m毎に1個のステーションがあると言います。私の肌感覚ではありますが、普通のガソリンスタンドよりも探すのが簡単であると感じます。電気自動車の購入に対する補助金の金額は日本と大差ありませんが、購入後の不安要素の一つである充電ステーションへのアクセスの良さというのは、消費者にとってもポジティブなことです。実際に日本の新車販売の内、たったの1%未満がEVであるという状況に対して、オーストリアでは2021年時点で20%以上がEVとなっています。販売数の増加とインフラ整備は相関関係にあるとは考えられますが、その効果が大きく現れていると感じます。

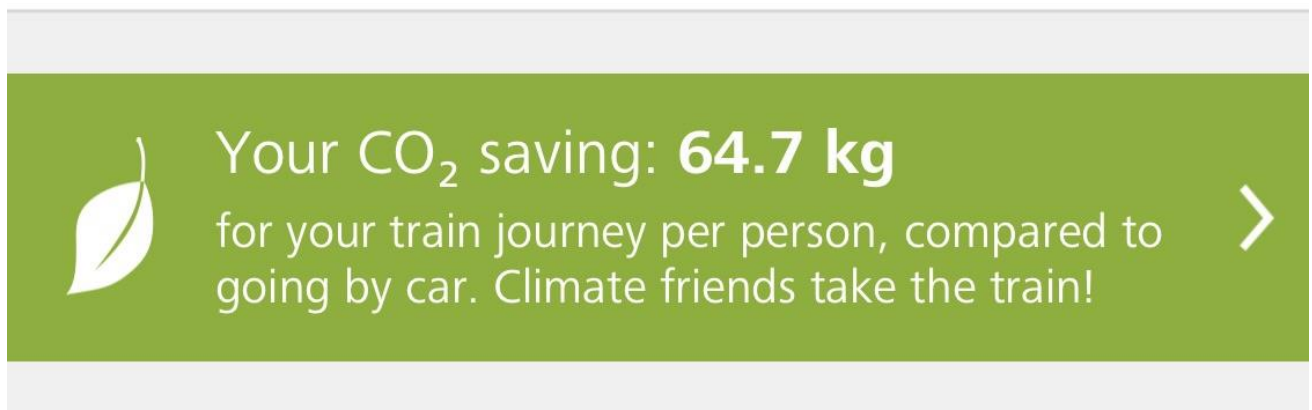
同じく交通に関連して公共交通機関を見ていくと、ウィーン市内の交通機関は東京と同等の利便性を持っていると感じ取ることができます。しかしながら、今回注目したのはその利便性ではありません。それはチケットに記載されている内容についてです。添付されている写真を見るとわかるのですが、ここに書かれているのは、電車を利用したことで自動車と比べてどれだけ二酸化炭素の排出を抑えることができたかというのを示した数字です。これにより消費者は、環境問題が身近なところに存在しているのか、また車を使わないというたった一つの選択でどれだけ環境に影響を与えるのかを知ることができます。企業が消費者とともに環境問題を解決していこうという姿勢がよく見て取れる例であると感じます。

最後に私が環境経済学という学問を研究されているシュターグル教授の講演に行った際に学習したことを紹介したいと思います。環境対策を施行する上では、科学技術というのが全ての基礎になります。しかしながら、今日では利用可能に近い技術でも、その利用が政府からの何らかの制限・規制によって妨げられていることが少なくないということを教授は説明されました。つまり+1.5度という指標が間近に迫る中で、政府による環境対策への積極的な姿勢が今後は不可欠であると考えられます。そのため私達がやらなければならないことは、上記で説明したような企業や自治体が提供する選択肢から選んでいくだけでは足りないのかもしれません。つまり、政府に積極的な環境対策を求めていくことが必要では無いでしょうか。例えば、デモへの参加やESGを意識した投資などは、民主主義の法則に則って行政に直接的に働きかけることができるでしょう。実際にウィーン市内では、デモが週末になると盛んに行われていました。もちろんウィーンにも気候変動対策に反対する人は存在しますが、だからと言って初めから諦めるのではなくて声に出してみる、そんな姿勢が大切なのだと学びました。

この環境問題に関しては、当然たった一人の個人の行動で全てを良い方向へ変えることはできません。しかしながら、自分の考えを周りの人と共有し、その効果をさらに波及させていくことで何かが変わっていくはずです。デンマーク人が私に気づかせてくれたように自分がその役割を担っていきたいと考えます。私たちに残された時間は6年と2/3ほどしかありません。今、行動が必要なのです。



ウィーン市内の水飲み場。



電車切符に表示されている、自動車と比較した二酸化炭素セーブ量。これはミュンヘンーザルツブルク間のもの。



ウィーン市内で多く見られる EV 用充電ステーション。



スーパーで使われている紙袋。

参考文献

・ Global Note, 「世界の一人当たり名目 GDP (IMF)」, 2021

<https://www.globalnote.jp/post-1339.html>

・ Climate Clock

<https://climateclock.world>

・ WIEN ENERGY, “An EV charging station every 400 meters”,

<https://annual.wienenergie.at/en/2020/AR8bQ7qu/an-ev-charging-station-every-400-metres/>

② 「留学前と留学後の自分」

自分の留学経験をこのような形で振り返っていく前に、私と同じように入学し来年、卒業していく同大学の同級生に一つ質問をしてみたい。この1年間で私と同じくらい、またはそれ以上に価値観の変化や内面的な成長を感じた友人はいるかという質問だ。極めて主観的な意見になるが、恐らく「はい」と回答できる人の数は少ないだろうと思う。1年間という一見して短い数字であるこの期間ではあったが、私は今まで自分の弱点でもあった消極性というのを一掃することができたと帰国した今感じている。

簡単に留学前の自分を振り返ると、私自身を一言で表すことができたと考える。それは「流される人」。留学前の自分は周りに流されるだけであったと自覚している。つまりは自分で考えて行動してみろというアイデアが欠如していた。というのも、私の周りには家族や学校の先生など既に自分以上の経験と知識を備えた人が集まっていたからである。その人たちの意見を聞き、言う通りに行動していれば、自分にとって悪いことは滅多に起きることはなかった。そもそも留学というアイデア自体もカナダに留学していた姉にインスパイアされたものだ。ここから分かるように、留学前の自分はしっかりと構築されたコンフォートゾーンにいたのである。こんな状態にあったからこそ、一度そんな環境から抜け出して自分にチャレンジしてみたいという気持ちで交換留学に参加しようと考えていた。しかしながら出発前にはこんな挑戦的なマインドセットとは裏腹に、心の中は不安でいっぱいだった。新しい生活の慣れることはできるだろうか、また周りの学生と上手くやっていくことができるだろうかというようなことを荷物のパッキングをしている際に、ずっと考えていたことを覚えている。

案の定、2021年9月1日から約一年の間、何も考えずに快適に過ごしていただける空間はウィーンには存在しなかった。そもそもオーストリアという国名自体も日本人にとってはあまり馴染みのないものである。日本にいる友人の中でも、オーストリアの位置が分からない人やオーストラリアと勘違いする人も少なくなかった。私自身も正直、オーストリアという国について詳しく知っていたわけではなかった。到着して初日、エスカレーターではステップの右側に立てなければならないことやスーパーの会計は東京の2倍急かされるところなど、東京との違いを感じ非常に戸惑ったことを覚えている。学期が始まってからもそのような戸惑いを多く体験した。初めに授業で問題になったのが、「英語が聞き取れない&伝わらない」ということだった。準備はしてきたつもりではあった。しかしながら、実際に会う留学生たちはそれぞれ母国語のアクセントを持っており聞き取るのに精一杯であった。話の流れを理解できずに会話に参加できないということは少なくなく、また話しても自分の日本語アクセントの付いた英語では伝わらないということもたくさん経験した。このような経験をするたびに、教室内にすることが嫌に感じることもあった。困難を感じたのは、授業内だけではない。私は大学のアメリカンフットボール部に参加していたのだが、40人近くいるチームメイトのほとんどは現地のオーストリア人、もしくはドイツ人で占められており、留学生は僕を含めた二人しかいなかった。もちろんコーチングやチーム内のルール説明もドイツ語で行われる。ドイツ語は大学の1、2年時に学習はしていたが、いきなり風変わりなウィーンアクセント付きのドイツ語を前にどうすることもできなかった。そのため、トレーニングに関しても、周りをみてそれをまねすると言うことしか最初はできなかった。留学する前と同様に、ここでも周りからの影響を受けて“流されてしまっている”と感じていた。

こんな状況の中で私が回数を重ねるごとに心掛けたのが、自分から積極的にコミュニケーションを取りに行くということだった。なぜなら、自分からテーマを発することで話されている内容を常に確認することができたからである。フットボールの練習では、チームメイトがドイツ語で話していても、自分から積極的に英語で話しかけていくことで会話の内容をしっかりと確認する同時に、自分の存在を相手に認知させることで周りに流されるという状態を脱することができた。この戦法の効果はそれだけではなく、自分から言葉を発することで自分を含めたチーム内に話しやすい雰囲気形成されていくのを感じ

じた。このトリックに気づいた時に自分の授業や練習に対する気分が一変して楽しいものになっていった。

またそのようにコミュニケーションをとっていくなかで、日本人としてのアイデンティティを再認識することができたと感じている。というのも多様なバックグラウンドを持つ友人たちと会話する際には必ずと言って良いほど、「それって日本ではどうなの？」という質問を受けた。その中心となる話題は簡単な日常生活での経験から政治や文化などに渡った。そのような質問を繰り返し受けているうちに自分がどのような属性にあるのか再確認することができた。例えば、日本人の相手を思う気持ちというのはそのようなコミュニケーションの中で私が日本人の良いところの一つとして再認識した点だろう。この相手の気持ちを推し量るという能力は世界でも稀有なものであると感じる。そして、この考えは日本で生産される商品にもその商品の品質として表れていると思う。小さいところで言うと、ウィーンではお菓子の袋さえ開けるのが一苦勞であったし、エスカレーターに乗っても振動が非常に大きく乗り心地は悪かった。このような面倒は日本では経験しなかったことだが、これは日本人が相手の気持ちを推し量り、それは商品に反映させた結果ではないだろうか。私としてもあwこのアイデンティティを再確認し、ディスカッションにおいても相手がどのようなことを言いたいのか考え、発言を選ぶことができたと感じている。

考えてみれば、ヨーロッパというのは色々なアイデンティティの集合体が寄り合わさっている。例えば、ドイツ人とオーストリア人。共にドイツ語を母語としており違いがよく分からないと言われることがあるが、それぞれにユニークなアイデンティティがある。地理的な距離が近く自由に異なる地域を行き来できる彼らには、相手と自分を比較し自身のアイデンティティを確立するのが比較的簡単であるかもしれない。しかしながら日本にいればそのような状況は日常的にはないだろう。これこそ留学をして良かったと思えるメリットの一つである。

以上のようにして、自分の力で生き抜くと言う気概や成功の体験を積み重ねたことで、自力の思考力というものが自分のものになったと留学を終えて感じる。たった1年間という短い期間であったが、小さい頃から消極的であった自分を少しでも変えることができた。自分にとって大きい変化がこの期間にはあったように感じる。

また、自分でやってみようとするのが身についた一方で、周りの助けのありがたさというのは日々感じていた。留学中にはもちろん一人でどうにもならないことがあった。例えばオーストリア滞在に必要な書類に幾多に並ぶ知らないドイツ語に困惑した時、勉強で忙しくなりメンタルブレイクダウンを感じていた時。そんな時に自分を助けてくれたのは自分自身ではなく、周りの友人たちであった。このような経験があったからこそ、今まで育ててくれた家族や先生、友人が周りにいてくれることのありがたさを確認し、大切にしていかなければならないと感じた。

周りの人を大切にするということに関して、オーストリアで学んだ私が気に入っている文化がある。それは「ゲズントハイト」という言葉だ。ドイツ語で「健康」を意味するこの言葉は、誰かがくしゃみをした時に英語の「ブレスユー」と同じように使われる。ただ、これのおかしなところは街中にいる赤の他人にさえも、この言葉をかけるということだ。私は慢性鼻炎でくしゃみをよくしてしまう。その時に授業中でもスーパーにいてもどこでも誰かが「待っていました」とでも言うように、すぐさまこの言葉をかけてくれた。それに対して「ありがとう」と答えた回数は数え切れない。留学中はこれに習って私も同じように赤の他人でもこの言葉をかけていた。日本人は基本的に礼儀の正しい文化を持っているというが、それを言葉ではなくお辞儀などの行動で示すことが多いように感じる。しかし、この文化からわかるようにオーストリアでは直接、言葉にして相手へのリスペクトや気配りを示していた。言葉というのはコミュニケーションを取る際に一番わかりやすく自分の気持ちを表現する方法の一つである。何かがあったら言葉にして表現してみる。この姿勢はオーストリアで学んだ貴重な経験であるように感じる。